



学生への周知は、対面で行う内容をプログラム①、メールでのやり取りをプログラム②、オンラインでのやり取りをプログラム③とし、昨年度同様、プログラム開催 1 週間前を目途に学生のメーリングリストへ一斉メールを送り、また、国際交流支援室の HP を通じても行った。参加希望の申請は昨年度同様に、Google フォームを使用し、メール、SNS での申請も受け付けた。昨年度から参加希望の受け付けは 1 日延長し、木曜日（前日）の 17 時までとした。

#### プログラム①の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出してもらおう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、添削してほしい文書を 2 部印刷して持ち、金曜日の 13 時 10 分に会場に直接来るよう伝える。面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話をしたい場合は自分が用意した資料および読書する書籍などを持って来るよう伝える。
- 金曜日の 13 時 10 分からサポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら文書の添削、面接・プレゼンテーション等の練習、読書等を進める。
- 文書の添削が終わった時点で学生は添削結果を持ち帰る。面接・プレゼンテーション等の練習、読書の場合も練習を進めながら修正した資料、メモ等を持ち帰る。

#### プログラム②の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出してもらおう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、添削してほしい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。
- サポーターの方々に金曜日の 13 時に会場に集まってもらう。
- 学生から送られてきたファイルを担当者が印刷し、サポーターの方々に手渡す。
- 日本語をその場で直してもらい、添削が終了したファイルを担当者が預かる。
- 担当者が預かったファイルをスキャンし、その日のうちに学生にメールで返送する。その際、必要に応じて添削した部分に関するサポーターのコメントを学生に伝える。

#### プログラム③の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出してもらおう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、オンライン上で添削を受けたい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も事前にサポーターが添削して準備できるように、資料のファイルを送ってもらう。

- 添削する資料を受け取り次第、Google Meet もしくは Zoom ミーティングの URL を学生に送る。
- 当日はパソコン、ヘッドホン、消毒グッズを教室およびオンラインやり取りを行う部屋に準備しておく。
- サポーターの方々に金曜日の 13 時に会場に集まってもらう。
- 13 時から 13 時 45 分の間にサポーターにファイルを確認してもらい、13 時 45 分から学生とやり取りをしながら日本語の添削を進めてもらう。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も練習を進めながら資料を修正したり、メモをとったりし、ファイルが学生に残るようにする。

## 2. 2025 年度の実施状況

2025 年度のプログラム実施状況は表 1 の通りである。2025 年 5 月 23 日から 2026 年 1 月 30 日まで、計 25 回のプログラムを実施した。

表 1 2025 年度日本語学習支援プログラムの実施状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1日	火							水	土	月	木	※2
2日												
3日							祝明会					
4日				金①								
5日									金③			
6日			金①									
7日								金④				
8日												
9日										金②		
10日							金①					
11日				金③								
12日									金③			
13日			金④							※1		
14日								金②				
15日												
16日		祝明会								金②		
17日							金⑤					
18日				金⑤								
19日									金③			
20日			金⑤									
21日								金⑥				
22日												
23日		金①								金④		
24日							大学祭					
25日				金⑥								
26日									金①			
27日			金⑥									
28日								金⑦				
29日												
30日			金②							金⑤		
31日							金⑧					

※1→1月13日 卒業研究、修士論文、博士論文提出期限  
 ※2→2月2日 課題研究論文、特定研究論文I・II 提出期限  
 1月は上記※1※2、留学生のニーズ、サポーターの都合等により実施日が変更する場合があります。

昨年度同様、大学院生 2 名（外国人留学生）を AA（アドミニストレイティブ・アシスタント）として採用し、プログラム前後の事務作業、教室の準備作業（換気・消毒作業など）を手伝ってもらった。これら 2 名の大学院生は執筆した論文等を添削に出しながら、AA としてプログラムの実施に貢献し、サポートする側としても活躍した。

### 3. 2025 年度の参加状況

2025 年度の全 24 回のプログラムには、学生および社会人を含めて 21 名の参加者があり、延べ参加回数は 58 回であった。そのうち、学生参加者の在籍課程ごとの内訳は、学部生が延べ 1 回、学部研究生が延べ 5 回、博士課程前期の学生が延べ 28 回（M1 が 18 回、M2 が 10 回）、大学院研究生が延べ 3 回、博士課程後期の学生が延べ 13 回であった。

今年度は 5 月から通常通りに運営を開始できたが、参加者数および添削した文書の総量は前年度より減少する傾向が見られた。特に、新規参加者が例年より少なくなっている。10 月に入学する学部研究生からの参加者は見られなかった。また、2024 年度には教育学研究科以外に文学研究科及び経済学研究科からの参加者も複数あったが、2025 年度には他研究科からの参加者は 2 名のみと少なかった。第 15 回（11 月 14 日）には、参加者がおらず中止となったこともあった。

プログラムの参加形態を分析すると、対面（プログラム①）での参加が最も多く、メールを通じたやり取り（プログラム②）による参加は減少傾向にあった。また、今年度は投稿論文や特定研究論文など、比較的ページ数の多い文章の日本語添削を目的とした複数回の参加が減少した。一方で、留学生の間では文章添削よりも対面での会話練習に対するニーズが高まっていることが確認された。

なお、本年度は通常参加してきたサポーター 6 名のうち 1 名が健康上の理由で活動に参加できなかったため、1 回につき最大でも 5 名のサポーターという状況であった。

表 2 2025 年度日本語学習支援プログラムへの参加状況

回数	実施日	参加者	プログラム別の参加者			サポーター人数	ファイルの書類	
			①	②	③		ワード	スライド
第 1 回	5 月 23 日	3	2	1	0	5	15	
第 2 回	5 月 30 日	3	2	1	0	5	16	
第 3 回	6 月 6 日	2	1	1	0	4	9	
第 4 回	6 月 13 日	3	3	0	0	5	9	
第 5 回	6 月 20 日	3	1	1	1	3	5	
第 6 回	6 月 27 日	2	2	0	0	4	4	

第 7 回	7 月 4 日	3	1	2	0	4	14	
第 8 回	7 月 11 日	3	1	2	0	5	11	
第 9 回	7 月 18 日	3	1	2	0	3	20	
第 10 回	7 月 25 日	4	2	1	1	5	24	
第 11 回	10 月 10 日	2	1	1	0	5	79	
第 12 回	10 月 17 日	2	1	1	0	5	15	
第 13 回	10 月 31 日	4	3	1	0	5	10	40
第 14 回	11 月 7 日	1	1	0	0	3	2	19
第 15 回	11 月 14 日	0	0	0	0	5	0	
第 16 回	11 月 21 日	4	4	0	0	4	2	
第 17 回	11 月 28 日	5	4	1	0	4	17	
第 18 回	12 月 5 日	2	1	1	0	4	31	
第 19 回	12 月 12 日	1	0	1	0	5	91	
第 20 回	12 月 19 日	1	0	1	0	4	46	
第 21 回	12 月 26 日	2	1	1	0	5	35	
第 21 回	1 月 9 日	2	0	2	0	5	40	
第 22 回	1 月 16 日	1	1	0	0	5	30	
第 23 回	1 月 23 日	2	2	0	0	5	6	17
第 24 回	1 月 30 日	1	1	0	0	5	68	
計 24 回		59	36	21	2	5	599	76

#### 4. 課題

今年度の参加者数は、コロナ禍以降で最も少ない水準となった。2021 年度は 108 人、2022 年度は 117 人、2023 年度は 104 人、2024 年度は 79 人であったのに対し、2025 年度はさらに減少しており、特に 2024 年度以降、その傾向が顕著である。2025 年度第 1 学期は参加者が少なく、担当者はサポーターたちと協議のうえ、国際交流支援室の蔵書を活用した「留学生とサポーターと一緒に本を読む」活動を新たな選択肢として導入し、併せて新しいポスターを作成して周知を行った。しかし、第 2 学期においても参加者数は大きく改善せず、東北大学キャリア支援センターのスタッフと連携し、留学生に限らず周辺地域の在日外国人にも周知を広げたものの、参加状況の改善には至らなかった。

そのため、担当者は複数名の留学生に対してヒアリングを行っている。参加者数減少の背景として、複数の要因が考えられる。一つは、周知方法の問題である。毎週金曜日に学生向けの参加案内メールを送信しているが、大学の DC メールを日常的に確認しない学生も一定数存在し、情報が十分に届いていない可能性がある。また、実施日時が金曜日の午

後に固定されているため、授業や研究活動と重なり、参加が困難な学生がいることも要因の一つと考えられる。

さらに、留学生を取り巻く支援環境の変化も影響している。指導教員や研究室内のチューター制度、学内外の他の日本語支援プログラムなど、学生が利用できる支援の選択肢が増えており、本プログラムの位置づけが相対的に不明瞭になっている可能性がある。

加えて、近年の大きな変化として、ChatGPTをはじめとする生成 AI ツールの普及が挙げられる。2024 年度以降、多くの留学生が AI ツールを活用して自主的に文章を修正するようになり、迅速かつ手軽に添削を受けられる環境が整った。その結果、文章添削を主目的とした対面支援の必要性が相対的に低下し、本プログラムへの参加動機が弱まった可能性がある。

今後の課題としては、生成 AI ツールでは代替しにくい支援内容をより明確に打ち出すことが重要である。具体的には、対面での会話練習や発話を通じた即時的なフィードバック、日本語特有の言い回しやニュアンスの微調整といった、人とのやり取りを通じてこそ得られる学習効果に重点を置くことが求められる。また、留学生一人ひとりのニーズをより丁寧に把握し、生成 AI の利用を前提としたうえで、人による支援の価値をどのように最大化するかを検討していく必要がある。これらの点を踏まえたプログラムの再設計と周知方法の工夫が、今後の参加者数の回復とプログラムの持続的な発展につながると考えられる。

## 5. 日本語サポーターからのコメント：日本語学習支援事業に参加して

今回も日本語サポーターの方々より今年度の活動に関するコメントをいただいている。以下に紹介する。昨年度からは対面方式、オンライン方式の添削のほかに面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話の練習が加わり、サポーターの方々には多くのご負担をおかけしてきた。にもかかわらず、サポーターの方々は、新しい実施内容と方法を前向きに受け入れ、一緒に検討や提案をしてくださり、日本語学習支援事業担当スタッフと学生を支えてくださった。記して心より感謝を申し上げたい。

### 奥平 正子 氏 （事務局）

2014 年秋から始まったこの「川内日本語サポート会」は、昨年 5 月から 11 年目となりましたが、従来のサポート会メンバーは誰一人辞めること無く、そのまま継続して頂いて開始することが出来ました。

事務局の私としてはとても嬉しいスタートとなりました。

ところが、昨年 5 月から今年の 1 月までの留学生の出席者は今までに比して、とても少なく推移して非常に残念に思いました。添削指導だけでなく、会話面での私たちの出番がもっとあれば、お互いに「意思の疎通」もはかれて、より効果的で楽しい時間を持てたの

ではないかと残念に思われてなりません。

サポーターの方々はそれぞれ大学教育を受けておられ、かつて高校教師をしておられた方も 2 名おりますから、様々な質問にも対応できますので大いに活用して頂きたいと願っております。

#### 阿曾 容子 氏 (サポーター)

「サポート会」に参加して 7 年になりました。学生のレポート等の添削を中心に活動しております。昨年驚いたことは、学生のレポートが AI 活用によって自国語から日本語へ、また、日本語を日本語らしい日本語表現へ変換でき、学生がそれをよく利用していることを知ったことです。ですが、この 1・2 年で今は世の中も AI の役割が非常に大きくなっています。50 年前に愛読していた星新一の SF 小説が現実味を帯びてきた実感です。世の中の変化に、添削を中心に活動してきたサポート会がどのように対応していくのか、また、学生にとって必要とされているのはどのようなことなのか、サポート会に何ができるのか、考えさせられた一年でした。

#### 佐々木 市子 氏 (サポーター)

留学生ならではの視点・テーマが多い。留学生にとって切実な問題を取り上げると一生懸命考えると思う。ここでしか出来ない勉強が出来たらいいと思う。(でも身近な問題も大切だが、もっと普遍的な大きなテーマもないわけではないと思うが。) 皆よくやっていると。今の私なら外国語でここまで自分の考えていることを表現できない。

内容は大学レベルだが日本人ならまず絶対しない間違いをする人が結構いる。(助詞の使い方など。) これは日本語の特色が現れているのかなと思う。でもそれに対する自分の説明が我ながら感覚的でまどろっこしい。自分でも勉強しなくてはと思う。しかし AI を使っているのか変な日本語が減った。(AI がどういうものなのか私にはよくわかっていないのだけれど。) AI が使えるからこの会に参加する人が減っているのか。でも対面で話し合うことの良い面もあると思う。AI なしで日本語を綴れるようになった方が良く思う。

私もちょっと(?) なまっているのだけれど、日本語の抑揚や間の取り方など実際に使ってみなければわからない。積極的に参加する人が伸びるのだと思う。気楽に雑談でもいいから来てくれたらなあと思う。外国の話が聴けるとこちらの勉強にもなる。その国の大学生活などについて知りたい。

週に一度程度大学に来るとこちらも若やいだ気分になる。留学生活の中で手に入れた人間関係(友人とか)を留学が終わってからも大切にしていってもらえたらいいと思う。少しでもお役に立てたら嬉しい。日中の架け橋になってくれればと思う。中国以外の人をもっと来るといいなあと思っている。

**馬場 徐子 氏** (サポーター)

生成 AI の普及が始まってわずか 3 年余り。今では複数の AI が登場し、その特徴に合わせた利用が周囲の日常生活でも広く見られるようになりました。一般にデジタル化が遅れがちな印象の行政ですら、今後効率化を目指し AI の積極的な活用に向けて動き出していることがメディアでも頻繁に取り上げられています。

今年度は、学生さんにも AI 技術の普及が少なからぬ影響を与えている事を実感した 1 年となりました。

今年度はサポート会への依頼人数や論文枚数がかかり減少しました。その原因のひとつが AI の利用によって会話練習や、文章作成が難なくできるようになってきたからではないでしょうか。実際、接した論文ではいずれも助詞や語法など以前よく見られたような文法的な誤りは比較的少なくなり、表面的には自然で読みやすい日本語が多くなりました。しかし、一方では接続詞の使用が適切でないため段落間の因果関係や主張の流れが読み取りにくいケースや、同一概念の用語であるにもかかわらず、ページが変わると統一されていない、一文に複数の主張を盛り込んでいるため長すぎる文章となっている、などの問題が見られました。これは、AI 翻訳ツールが部分的な翻訳にとどまり、論文全体や論理構成までには及んでいないからだと考えられます。

従って、これからは辞書による単なる誤字脱字の表面的な修正にとどまらず、論理性を見極め文章全体の構造に注視し、学生さんの研究成果が論理的かつ適切に伝わる文章となるような、これまで以上に質的な支援が必要と感じました（しかしその作業は、課題を専門としない私たちにとっては限界があるように感じますが）。と同時に AI を活用する機会がアカデミアに身を置く学生さんだけでなく、私たちにも日常生活の利便性を高めるために今後増えていくでしょうから、AI リテラシー（知識、判断力）を磨く必要性があると感じています。

**大久保 和雄 氏** (サポーター)

このサポート会に関わって 6、7 年は経つでしょうか。短いお付き合いですが、今年は今までとは違う変化が始まっているように感じられます。数年前までは電子辞書を利用していたのですが、今は分からない言葉が出てくると、スマホを取り出しています。紙の辞書も好きですが、スマホは便利です。便利なスマホとともに、便利な AI という存在が、いつの間にか私のような老人の生活にも入り込んでいました。AI はサポート会のあり方にも影響を与えているようです。

先日、私の知人が葬式の弔辞を頼まれたそうです。突然の話に悩んだ彼は、生成 AI の力を借りてみようと思いつきました。故人との思い出やら、訃報に接した状況などを入力すると、なんと素晴らしい弔辞が表示されました。必要に迫られ文章を書くには、これほど頼りになるアイテムはないと、知人は感動したようです。結局考えた末に、彼はその

完璧な弔辞はやめて、自分で書いた下手くそな文章を読んだそうです。

ちなみに、この文章はチャッピーのお世話にはなっていません。

## 6. 参加した学生からのコメント：日本語学習支援プログラムに参加して

今年度の日本語学習支援プログラムに参加した学生からもコメントをいただいた。サポーター、学生、我々がこの報告書で提示した意見や課題を参考に、来年度の日本語学習支援事業をさらに改善していきたい。

### 徐 諾（博士課程前期1年）

2025年度、私は日本語支援プロジェクトに数多く参加し、多方面にわたって大きな支援を受けました。特に、ボランティアの先生方には、文章添削や会話練習を通して、継続的かつ丁寧なご指導をいただきました。

文章添削では、単なる文法的な誤りの修正にとどまらず、文章全体の構成や前後の論理のつながりまで細かく確認してくださり、自分では気づきにくい非常に細かな表現の違いや不自然さについても、一つひとつ丁寧に指摘いただきました。そのおかげで、日本語の正確さだけでなく、読み手に伝わりやすい文章を書く力が大きく向上したと感じています。

また、会話練習では、日常会話だけでなく、面接を想定した練習にも対応していただきました。単に日本語を話す練習というだけでなく、内容の深さや考え方に踏み込んだ質問を多く投げかけてくださり、自分の考えを日本語で論理的に表現する力を養う貴重な機会となりました。こうしたやり取りを通して、日本語力だけでなく、自分自身の思考力や表現力も大きく成長したと実感しています。

さらに、教育学研究科のエン先生とアディア先生には、学習面だけでなく、プロジェクト全体の運営に関しても多くのサポートをいただきました。参加者としての立場から意見や感想を丁寧に聞いてくださり、常に改善を意識しながらプロジェクトを運営されている姿勢がとても印象的でした。

今年度は、昨年度と比べると参加者がやや少なかったように感じました。その背景として、まずこの日本語支援プロジェクトの存在や内容が、十分に周知されていない可能性があるのではないかと思います。加えて近年、AIを活用した文章添削や日本語学習の手段が充実してきたことで、「文章はAIで十分」と捉え、対面型の支援に参加する必要性や優先度を低く感じる学生も一定数いるのではないかと考えました。さらに、初めて参加する学生の中には、「事前に準備しなければならないのではないか」「日本語に自信がないと参加しにくいのではないか」といった心理的な不安から、参加をためらう場合もあると思います。

しかし一方で、実際の会話練習や、その場でのやり取りを通じたフィードバックは、現

時点では AI では十分に代替できない、本プロジェクトならではの大きな強みであると感じています。したがって今後の広報においては、特に①「会話練習ができること」をより前面に出して伝えること、②「特別な準備がなくても参加でき、気軽に相談してよい場であること」を明確に示すことが、初回参加のハードルを下げるうえで有効ではないかと思いました。さらに、オンライン参加が可能である点も、時間や場所の制約がある学生にとって大きな利点であるため、③対面・オンラインの両方に対応していることを、より積極的に周知していくことも重要だと考えます。

本プロジェクトを通して得た学びと経験は、私の日本語学習だけでなく、今後の学業や将来においても大きな財産になると考えています。改めて、関わってくださったすべての先生方に心より感謝申し上げます。

#### 李 曉揚（博士課程前期 2 年）

この日本語クラスでは、退職された校友の方々とリラックスして会話ができたと何より嬉しかったです。先生方はとても親切で、私の未熟な日本語を最後まで丁寧に聞いてくださいました。

日常会話だけでなく、レポートや論文の日本語についても具体的にアドバイスをいただきました。自分一人ではどうしても直せなかった細かい助詞の使い方や、文と文のつながりについて、「ここはこう言ったほうが伝わるよ」と優しく教えてもらったことが印象に残っています。

これまでは論文の日本語を直すのが苦痛でしたが、先生方と話しながら修正していくうちに、少しずつ書くことへの抵抗がなくなってきました。日本語の正しさだけでなく、伝えることの楽しさを改めて感じる事ができ、本当に参加してよかったです。